

令和7年度 京都府立清明高等学校

ティーチャーズバイブル

～ 理論編 ～

校長 川畑 由美子

はじめに



かつて紫野グランドと呼ばれていた場所に清明高校が生まれたのは2015年。以来、わたしたちは、さまざまな志望動機や学習経験のある生徒たちが自分のペースで学べるよう、フレキシブルな教育システムやICTを活用しつつ、教育内容の質の向上に努め、10年が経ちました。

次の開校20年目を目指してこれからの清明高校をどう創る？

令和7年度のスタートにあたり、ティーチーズバイブル（理論編）を改訂しました。

教育システムの5つの特長

学ぶ時間帯 × FLEX

POINT
1

自分に合った
時間帯で学べる



自分のライフスタイルや将来の目標に応じて、午前コースと午後コースのどちらかを選択し、自分に合った時間帯で学ぶことができます。また、いずれのコースを選択しても、科目選択の工夫などにより、登校してから下校するまでの学ぶ時間帯を自分で設定することが可能です。

時間割 × FLEX

POINT
2

多様な科目から
自由に選べる

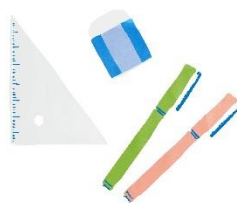


新設高校では、選択できる科目が非常に多く用意されています。そしてそれらの科目を学年を越えて学ぶこともできます。単位制のメリットを活かして自分に合った科目を自由に選択し、自分だけの時間割を作ることができる点が他の高校と大きく違うところです。

学び方 × FLEX

POINT
3

学び方は
いろいろ



校内での授業だけではなく、他の学校や大学での授業、ボランティア活動、高卒認定試験の単位認定など、様々なスタイルの学習が可能です。また、1年間を通して学ぶ科目の他、半年で単位を修得できる科目や短期集中講座なども選択することができます。

高校生活 × FLEX

POINT
4

74単位 + α =
無限大の高校生活



新設高校では、卒業に必要な単位数を最も少ない74単位に設定していますので、1週間あたりの授業時数も自分のペースに合わせて選べます。興味のある科目をもっと選択したり、校外の活動に力を入れたり、高校時代の生活全体をトータルにデザインすることが可能です。

修業年限 × FLEX

POINT
5

自分のペースで学んで
3年で卒業も



新設高校では、全日制課程と同じように3年間での卒業を可能にしています。午前コースの人が週に数回、午後コースの科目を選択したり（午後コースの場合はその逆）、高卒認定試験での合格科目等を合算することで、卒業に必要な単位数を3年間で修得することができます。

CONCEPT

基本コンセプト

学び アンダンテ

「アンダンテ」とは、曲のテンポを表す音楽用語。「歩くような速さで」という意味のイタリア語です。流れる景色、軽やかなリズム、光る汗…。風を切って走るの気持ちいい。でも、人のペースを気にしたり、少し無理をしてしまったりで、自分のペースが乱れてしまうことだってあります。そういうときは、ゆっくりでもいいから、少しずつでもいいから、歩きはじめればいい。「少」し「止」まってまた「歩」く。千里の道も一歩から。新たな一歩を踏み出すとして、自分のペースで学ぶとして、そうしたみなさんにとって無理なく過ごせる学校でありたい。だから、「アンダンテ（=歩くような速さで）」をこの学校のコンセプトにしようと考えました。

VISION

理想の学校像

MISSION
私たちの使命

耳を澄まし、学びを支え、自信と可能性を
居けること。それが私たちの使命です。

VISION
10年後の姿

新たな学びを創造し、すべての人が安心して
通える、すてきな学校となっている。

VALUE
大切にしたいこと

軒遊び（つかず離れず）
自然体（無理なく）
大丈夫（やってみなはれ）

STUDENT

求める生徒像

新たな一歩を踏み出すために、
自分のペースで学びたい生徒

例えば……

- サポートシステムを活かして自分の学びのスタイルを見つけない生徒
- 単位制というシステムに魅力を感じ、積極的に活用したい生徒
- 学校から遠ざかっていったが、もう一度学校生活をやり直したい生徒
- 中学までの勉強をやり直し、基礎的な学習からスタートしたい生徒
- 素直に笑いたいときに笑え、素直で過ごせる雰囲気好きな生徒

上の資料は・・・ 2014年・春、まだ「清明」という校名

すらなかったときに発行された、最初のパンフレットです。

当時のコンセプトや求める生徒像は今も大切に引き継がれ、教育活動に生かされています。その一方で、開校から10年目までに、生徒の実態や学校のリソース、社会の変化などに応じて、教育活動をアップデートすることに挑戦もしてきました。

私自身、副校長として着任以降「創立期から充実期への進化」としての改革を共に歩んできました。

ここ5年間の改革の軌跡を次の表にまとめましたので、御確認ください。それぞれの取組についての説明は省略しますので、新転任の先生方は、周囲の先生方に尋ねてみてください。

	1	2	3	4	5	6						
	前期	後期	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期	
学ぶ楽しさ		考査前・休業中補充廃止 GO TO スタディ	定期考査縮減（5回→3回） 寺子屋学習会		定期考査廃止 アンダンテ科目再編・習熟度別講座希望選択制 フレックススタディ 新しいフレックス科目設置 金年次探究活動				総合的な探究の時間の充実 進学補習の見直し	教えない授業試行 自由進度学習試行	全科目で自由進度学習導入 通信教育の試行	つばめプロジェクト（縦割り型探究）
主体的な活動		学校祭（実行委員会・クラス企画・体育祭級収） チャレンジデー Sフェス オフィスアワー	学校祭（地域コラボ・地域開放、祝日実施） 校外学習 オープンキャンパス（生徒主催、実行委員会） つばめ杯	ボランティア清掃 生徒リポーター・広報ボランティア ブレイベント（発表会、ゲーム大会等） サマーキャンパ		ワーキンググループの活動範囲の拡大 通級指導のシステム変更 ボランティア選考の発行 つばめ祭での模擬店		タタ活推し活GP			生徒企画イベント	
学習者起点の地方化	ランチミーティング		「育てたい人間像」策定	アンケート等の見直し 入学説明のオンデマンド化 入学生・保護者アンケート デジタル学生証 トイレ温便座化 生徒情報一元化 出欠状況の月次連絡			ソファのある教室の整備 チルススペースの拡充への取組 職員室呼び出しシステム運用	生徒による教職員研修		ファミレス風・畳のある教室の整備 チルグッズの貸し出し		
教育のU/D化		ウォームアップ週間（4月2週目） リフレッシュデー（年3回） TEAMS導入	卒業に向けた進路確認	リフレッシュデー拡充（月1回） SHR縮減（通2回に） 研修旅行廃止 サマーキャンパス開始 寺子屋R O O M 平常清掃廃止（H R清掃＋ボラ清掃に）	特別事情在り方整理 標準服試行	標準服・身だしなみ規定改定 小冊子の作成・配布		進路学習資料のオンデマンド化 スロープ他整備拡充	DE&I フロントティアキャンパス開催			
働き方改革	Slack導入 職員朝礼廃止 生徒欠席連絡のWEBフォーム化 電話応答時間の設定（8:30～17:00） 通知票所見・押印廃止 中学校訪問縮減（私学のみに）	指導要録・調査書所見のテンプレ化 チーム会議廃止 考査・長期休業中の会議・校内研修の禁止 面談週間の校時短縮	中学校訪問廃止 チーム会議廃止 考査・長期休業中の会議・校内研修の禁止 面談週間の校時短縮 職員室カフェタイム 職員スポーツ大会	ノー残業ミュージック 夏期休業延長（～8/31） 創立記念日休業 受講登録進路短縮授業 来府日々連絡廃止 Random（雑談チャンネル） リフレッシュデー年休奨励	退勤宣言カード・ノートカードの活用 入学説明等のオンデマンド化 職員室フリーアドレス化試行 年休履のデジタル化試行 教職員研修等のオンデマンド化		職員室フリーアドレス化拡充					

INDEX

今年度もどうぞよろしくお願いいたします。今日お話しする内容は、次の4つです。

- ① 本校のコンセプト
- ② 入学から卒業まで
- ③ 支援の方針
- ④ 5つのアクションプラン

① 本校のコンセプト

【基本コンセプト】

学びアンダンテ

「アンダンテ」とは、曲のテンポを表す音楽用語。
「歩くような速さで」という意味のイタリア語です。

流れる景色、軽やかなリズム、光る汗・・・。

風を切って走るのは気持ちいい。

でも、人のペースを気にしたり、少し無理をしてしまったりで、
自分のペースが乱れてしまうことだってあります。

そういうときは、ゆっくりでもいいから、少しずつでもいいから、
歩きはじめればいい。「少」し「止」ってまた「歩」く。
千里の道も一歩から。

新たな一歩を踏み出すとして、自分のペースで学ぶとして、そうしたみなさん
にとって無理なく過ごせる学校でありたい。だから、「アンダンテ（＝歩くよう
な速さで）」をこの学校のコンセプトにしました。

（最初のパンフレットより）

【mission】 --- 私たちの使命

学ぶ楽しさを提供する

ミッション（私たちの使命）は「学ぶ楽しさを提供する」です。

高校時代にどれだけたくさん勉強したとしても、それが原因で勉強が嫌いになり、その後の80年を学びから遠ざかって過ごすとするば、それほど不幸なことはありません。清明高校では「高校時代にどれだけ学習したか」よりも「高校卒業後にどれだけ学びに向かえるか」を、そして「学ぶ苦しさの記憶」よりも「学ぶ楽しさを実感」することをなによりも重視しています。

単に教科書の中の知識やスキルを与えたり、問題の答えや解き方を伝えるのではなく、多様な学習活動を通して「学ぶことの楽しさ」自体を届けたい。教科書を終わらせることより、「学ぶ楽しさ」を実感できることを大切にする、そういう学校でありたいと思っています。

そのためのアプローチを3つあげます。

1 つ目は、「学ぶ苦しさを提供しない」

です。右のツイートは、少し前のものですが、「学ぶ苦しさを提供してしまっている学校の悪い面が的確に言い表されています。このような、苦行としての勉強をやらされた生徒は、たとえやり切ったとして

も、「やれやれ」とか「やっと解放される」という感想しか持たないでしょう。仮に罰としての勉強はさせていないとしても、やはり学校というのは、生徒たちに「学ぶ苦しさを提供し続けてきた、勉強が嫌いな生徒を一所懸命量産しつづけてきたという側面が少なからずあるのではないのでしょうか。「学ぶ楽しさを提供する」ためには、なによりもまず**「学ぶ苦しさを提供しない」**ということが大前提で、そのために現在本校で当たり前となっている施策が宿題・補充・特訓等の廃止であり、一律一斉の教え込みの廃止であると言えます。



無駄のない無駄な発想力
@al_mudahassou

...

一番親を尊敬した瞬間は、小学生の時忘れ物の罰として漢字の100回書き取りをやっていた教師に「勉強を罰として使うな。勉強は力をつける行為のはず。教師自ら苦痛と認めてどうする」と直訴に行った時。

午後8:00 · 2017年9月6日

1,532 件のリツイート 18 件の引用ツイート 4,466 件のいいね

2つ目は、「**学びの捉え直し**」です。これは、従来の「学び直し」とはコンセプトが異なるということを確認しておきます。

これまでの「学び直し」は、小・中学校時代の学習内容の復習や未定着箇所の再学習により知識・理解を補完し、高校での学習をスムーズに進めることが目的でした。しかし、本校にはさまざまな理由から、「わ

からない」「できない」「もういや」というように、学ぶことに強い苦手意識のある生徒が多数在籍しています。そうした生徒が、「わかる」「できる」「もっと」という体験を通じて**学習に対するイメージチェンジ**に至ること、つまり「**学びの捉え直し**」を最大のねらいとしています。AI学習アプリ「すらら」を用いた自学自習型の学び直し科目「フレスタ」や、その中で行っている学習スタイル別の講座編制（右上図）は「学びの捉え直し」を最大の目的としています。



Aタイプ

スタイル▷ 自分でもくもくと進める個人学習

ルール▷ 私語はしない



Bタイプ

スタイル▷ 先生からのサポートを積極的にうける個人学習

ルール▷ 私語はしないが、先生との会話は可能



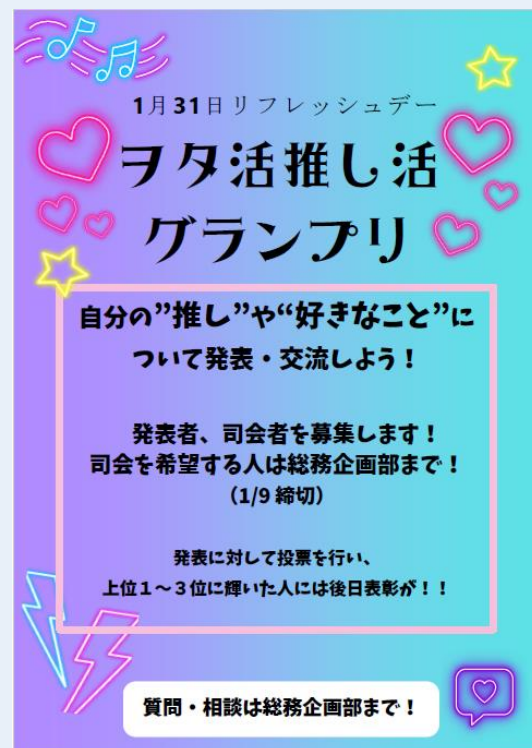
Cタイプ

スタイル▷ 仲間と楽しく学び合うグループ学習

ルール▷ 周囲の迷惑になることはしない

3つ目は、「好きや得意の伸長」です。1月のリフレッシュデー「ヲタ活推し活グランプリ」で堂々と披露する発表者とそれを受け入れるメディアルームの観客や、「いいね」ボタンを連打するリモート参加生徒。3月のつばめ杯の「e-スポーツ」での熱い盛り上がり。さまざまなつまずきを経験し、人前でしゃべったり、イベントを仕切ることが苦手そうに見える生徒たちも、いざ自分の好きなことややりたいこととなれば、目を見張るような活躍を見せてくれます。その他、

さまざまな行事を通して、多くの生徒たちが高いポテンシャルを持っていることを表明してくれています。推し活やヲタ活など、**自己の「好きや得意の伸長」を学校として奨励し、さまざまなアウトプットの機会を設け、楽しく充実した時間を共有することで、生徒が自己肯定感や自己有用感を持ち、知的好奇心を持って高校卒業後も学びに向かう人になれると期待**しています。



【vision】 --- めざす学校像

つまずきのある人もない人も共に安心していきいきと学ぶ学校

ビジョン（めざす学校像）は「つまずきのある人もない人も共に安心していきいきと学ぶ学校」です。

障害者のためだけの特別なものを作るのではなく、障害があろうがなかろうが、誰にとっても使いやすいデザインを考えるというのが、ユニバーサルデザインの考え方です。



合理的配慮

ユニバーサルデザイン

障害のある人にとって使い勝手がよいモノやコトは、障害のない人にとっても使い勝手がよい。それを清明高校に置き換えると、不登校やつまずきなどの経験がある生徒にとって利用しやすい教育は、そうでない生徒にとっても利用しやすい、ということになります。そういう発想で、日々の教育活動はもちろん、私たち教職員のマインドセットづくりにも努めます。そのようにして本校で培われた手法やマインドは、必ずや他の全日制高校にとっても大切で、必要不可欠なものとなると確信しています。

清明ダイバーシティピッチ II

今年もやります。
生徒主体の研修会

SEIMEI DIVERSITY PITCH II

～開校10年目の今伝えたい清明への思い～

「清明だから、乗り越えられた。」

不登校
聴覚過敏
起立性調節障害
学びの多様性

事前申込なし
出入り自由！

令和6年9月25日(水)15:30-17:00

場所：清明高校大階段

清明ワーキンググループ

すべての生徒がいいきと学ぶ学校ってどんな学校？

DE&I

10月4日(金)
14:00～16:50(現地受付13:30～)
京都府立清明高等学校

不登校経験、発達障害、海外ルーツ、感覚過敏など、
多様な生徒が1つの教室で共にいいきと学ぶために、
先生はどんなことができるだろう？
そんな悩みや疑問を、一緒に学び、考えませんか？

対象	内容
小・中・高等学校の教職員、 その他教育関係者 ※他府県からも参加いただけます。	・先進校からの実践発表 ・意見交流 ・校内見学 ・DE&Iのフロントランナーからの フィードバック
参加方法 現地参加またはオンライン ※オンラインでは一部内容に御参加いただけません。	
会場 清明高校 体育館	御登壇いただけるDE&Iのフロントランナーの皆様
お申込みは、右の二次元コードから 必要事項を御入力ください。	
	 NPO法人eboard 代表理事 中村孝一様
	 Demo 代表 宮田謙様
	 京都府立大学 准教授 横道誠様

DE&Iとは？
多様な背景や特性をもつ個人が平等に尊重され、
参加できる環境づくりを目指す考え方

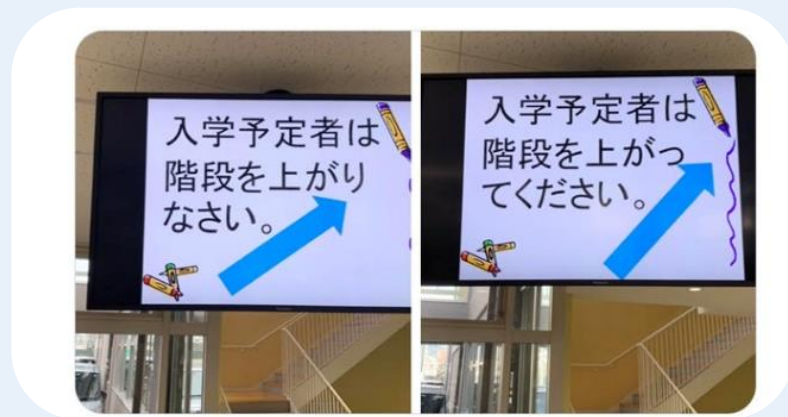
清明高校の取組
柔軟な教育システム・制服の標準服化・チルスペースの設置など、
広く教育のUD化に取り組んでいます。

【value】 --- 大切にしたい価値観

生徒をリスペクトする 倫理 トライ＆エラー

バリュー（大切にしたい価値観）です。

上の3つを大切にしたい価値観としているのは、逆にこれらの3つが（清明高校に限らず）教職員としての私たちが無自覚に不足しがちになると感じることがあるからです。



新入生向けのアナウンスを修正した例
(令和4年3月)



#01 生徒をリスペクトする

“respect”・・・。「生徒を尊重する」と言い換えられるでしょうか。参考にできるのは次の定義です。「存在そのものに価値があり、心身の苦痛を与えられ

the belief that something or someone is important
and should not be harmed, treated rudely etc
(ロングマン現代英英辞典)

たりぞんざいに扱われたりすべきでないという信念」と訳してよいかと思います。

おおよそ学校という所では、生徒を「尊重すべき人」としてではなく、まるでコントロール可能な対象として接し、生徒の意向を軽んじ、頭ごなしに注意したり、バカにしたり、時には脅したり、ごまかしたりしてきた面が少なからずありました。また逆に生徒を「未熟」「自立できていない」と思い込み、過保護・過干渉な対応にもなりがちでした。

生徒を「子ども」扱いするのではなく、「大人」扱いするのでもなく、**私たちと同じ一人の尊厳のある「人」として尊重しつつ接する**ことが「リスペクトする」ということだと思います。

#02 倫理

変化が激しく、複雑、あいまいで不確実な今の社会においては、法やルールの更新が現状に追いついておらず、校内規定等についても、改正作業の前に臨機応変な運用が迫られることが増えてきています。

そうした中、生徒・保護者の信頼を損なうことのないよう、合理的な判断と迅速な対応をしていくためには、たとえば法やルールに定めがなかったとしても、**社会通念に照らして「好ましくない」と思われる行動はとらない**という「倫理」がとても大切です。例年、紹介されていますが、何か判断に迷うことがあったときには、次の文に立ち戻ってください。

もし、このことが明日のワシントン・ポストの一面に載って全米中に知られることになったら、それを誇りに思うだろうか、それとも、恥ずべきことだと思うだろうか。

マイケル・アブラショフ『即戦力の人身術』

#03 トライ&エラー

インプットも熟考も大切です。しかし、**何よりもアウトプットを重視**します。まずは、20%の出来でいいので試作に取り組み、失敗しながら何度もアウトプットを繰り返し、少しずつ前進して完成にたどり着きます。オンデマンド授業も、リフレッシュデーも、シン・会議も、はじめは**遊び心**と「**すぐやる、まずやる、ざっくりとやる**」でした。

生徒のチャレンジも、**大人がレールを敷きすぎずに小さな失敗をどんどん**させましょう。サマーキャンプやつばめ祭、総合的な探究の時間やフレックス科目も、私たちは**手と口を出したいところをグッ**とこらえて、生徒の遊び心と好奇心を尊重し、多くの選択肢や適切な足場かけを準備し、トライ&エラーができる環境作りに努めましょう。

② 入学から卒業まで

【求める生徒像】

新たな一歩を踏み出すために
自分のペースで学びたい生徒

【育てたい人間像】

自分を知り、人とかかわり、ポジションをとる人



【求める生徒像】

新たな一歩を踏み出すために
自分のペースで学びたい生徒

・・・高等学校長が別に示す求める生徒像を十分理解し、当該高等学校での学習等に取り組む意志が明確であるもの。

上は、「令和7年度 京都府公立高等学校入学者選抜要項」に示されている、本校の出願資格です。このように出願に際して特別の限定はないため、本校に出願してくる理由は生徒によって本当に様々です。

ビジョンに「つまずきのある人もない人も・・・」とあるとおり、本校では「障害のある人と障害のない人が同じ場で学ぶ」というインクルーシブ教育の理念を踏まえつつ、さらに性的マイノリティ、外国にルーツのある人、ヤングケアラーなどを含む多様な生徒を受け入れています。このような「**分けない教育**」は守備範囲も広く、相互理解のハードルも高くなりますが、この「**教育のD E & I（ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン）**」が本校のめざすところです。

【育てたい人間像】

自分を知り、人とかわり、ポジションをとる人

自分の感情、思考、
行動を俯瞰する。

メタ認知能力

自分の弱みを伝え、
サポートを受ける。

受援力

自分にふさわしい持ち場を
見つけ、力を発揮する。

自己実現力

まず「自分を知る」。例えば、私は自分が視力がよくないということを**知っています**。ですから、視力を補うためにめがねをかけています。めがねを手に入れるためには、いいめがね屋さんを**紹介してくれる人**や、めがね選びの**アドバイスをくれる人**、視力を測ってレンズを**合わせてくれる人**など、「人とのかわり」が必要です。そして「ポジションをとる」。視力を補えたので、本を読んだり、テレビを見ることが可能となり、**自分の考えや意見を持ったり**、人や案内板を識別して**行動する**ことができるようになります。このように目立った障害がなくても、人は視力のようにだれでも弱みを持っています。そして弱みは「朝が苦手」「よく忘れ物をする」「文字の読み書きが苦手」「集団が苦手」など、人によってそれぞれちがいます。そうした自分の特徴を知って、人とかかわりつつ、社会の中で自分のポジションを見つける・・・

(R3学校説明会より)

③ 支援の方針

【心理的安全性の3つのレイヤー】

全体アプローチ 個別アプローチ マジヨリティの不在

【土台となる考え方】

ニューロダイバーシティ トラウマインフォームドケア
インクルージョン 社会モデル

【つばめ七則】

学習者起点 引き出す教育 長所の伸長 私たちが変わる
自信を返す 指導を伴う評価 伸ばす教育

【心理的安全性の3つのレイヤー】

令和6年度入学生の欠席日数（1学期末段階）

中1	中2	中3	高1
19	61	75	63
3	164	143	50
0	0	0	48
35	162	87	42
118	111	123	39
74	98	94	38
8	126	137	31
160	136	133	27
64	113	46	27
0	151	50	26
169	93	88	25
3	16	8	23
24	68	93	22
0	102	153	21
108	156	118	20
2	15	34	15
106	38	6	14
9	95	115	12
39	42	89	12
2	6	107	11
25	84	103	11
54	76	1	11
110	148	124	10
3	55	87	10
75	45	82	10
28	76	72	10
1	42	19	10
123	133	144	9
186	88	61	8
26	154	144	7

中1	中2	中3	高1
114	160	110	6
51	154	83	6
56	0	75	6
55	189	147	5
2	88	123	5
94	188	118	5
87	156	56	5
11	56	40	5
136	158	132	4
90	176	114	4
7	36	19	4
33	20	10	4
2	2	6	4
103	186	143	3
9	61	107	3
21	75	95	3
121	192	66	3
8	5	60	3
3	75	40	3
2	0	14	3
25	8	3	3
37	28	1	3
119	200	147	2
31	105	113	2
0	17	85	2
1	58	82	2
118	147	58	2
0	8	52	2
15	52	30	2
147	65	27	2

中1	中2	中3	高1
0	63	18	2
34	9	17	2
57	6	6	2
0	7	6	2
62	9	3	2
0	1	2	2
7	3	1	2
3	7	1	2
41	18	1	2
53	184	148	1
150	143	119	1
3	113	114	1
47	201	101	1
2	67	92	1
13	70	83	1
4	6	75	1
0	123	72	1
178	166	72	1
98	97	39	1
10	17	24	1
0	0	10	1
0	12	10	1
1	0	8	1
0	6	8	1
8	57	8	1
3	33	1	1
1	4	0	1
0	1	0	1
0	1	0	1
0	0	0	1

中1	中2	中3	高1
0	1	0	1
1	114	154	0
24	140	145	0
132	197	143	0
102	176	141	0
97	132	114	0
35	73	108	0
122	186	99	0
0	3	82	0
3	11	69	0
36	105	60	0
18	160	56	0
197	198	47	0
0	1	19	0
4	0	9	0
12	10	5	0
3	15	4	0
0	3	4	0
0	6	3	0
4	6	2	0
0	1	2	0
0	0	1	0
3	1	1	0
1	0	1	0
0	0	1	0
1	0	0	0
0	3	0	0
2	1	0	0
2	0	0	0
0	0	0	0

上の表は、昨年度（R 6）の入学生 1 2 0 名の欠席日数を表にしたものです。左から中学 1 年、2 年、3 年、高校 1 年の欠席日数で、中学校で年間 3 0 日以上欠席にはオレンジのマーカーをつけています。高校の欠席日数は入学してから 1 学期末までの欠席日数で、欠席の多い順に、左上から右下にソートしています。

やはり、本校には長欠経験者が多数入学してきているということがわかります。左上には、すでに高校での欠席が 3 0 日に達するなど、思うように登校できない生徒もいますが、その他のほとんどの生徒が順調に学校生活を送っていました。

どうして登校できているのか？ それには心理的安全性が大きく影響しており、特に清明高校が生徒に提供している心理的安全性には、大きく 3 つのレイヤーがあると考えています。

1 つ目のレイヤーは【全体アプローチ】です。時間帯・時間割・学習進度・修得単位数や修業年限などを、自分のペースに合わせてフレキシブルに選べるという「教育システム」です。

心理的安全性の 3 つのレイヤー

【全体アプローチ】…「自分のペースで学ぶ」教育システム

- | | |
|------------|---------------|
| ・午前・午後コース | ・オーダーメイドの時間割 |
| ・74 単位 + α | ・修業年限 3 ～ 8 年 |
| ・自由進度学習 | ・ICT |

2つ目のレイヤーは【個別アプローチ】です。入学者選抜での特例措置にはじまり、合理的配慮や通級指導などがこれにあたります。

3つ目のレイヤーは【多数派（マジョリティ）の不在】です。本校には多くの中学校から少数派（マイノリティ）が集まってきているため、小・中学校時代のように**標準に合わせるという圧力や周囲に対する劣等感を感じることが少なく、それが生徒の心理的安全につながっています**。特に本校の場合は、「み

んなそれぞれ、なんらかのつまずきや困りを経験してきている」、しかもそれは「**自分だけではない**」ということを、生徒たちもお互いにわかり合えている。そういう風土が、心理的安全性にとっても大きな影響を及ぼしています。

心理的安全性の3つのレイヤー

【個別アプローチ】… 多様な合理的配慮

- ・ 入学者選抜特例措置
- ・ 合理的配慮
- ・ 通級指導
- ・ 複数担任
- ・ SC,SSWによる相談
- ・ 福祉就労・高大連携

・ 自由進度学習 ・ ICT

心理的安全性の3つのレイヤー

【風土】… マジョリティの不在 = オールマイノリティ

多くの中学校から少数派（マイノリティ）が集合しているため、小・中学校時代のように標準に合わせるという同調圧力や、周囲に対する劣等感を感じることが少ない。

- ・ 通級指導
- ・ 複数担任、SCによる相談
- ・ 福祉就労・高大連携
- ・ オープンな学習環境
- ・ 7・4単位制
- ・ 修業年限3～8年
- ・ 自由進度学習
- ・ ICT

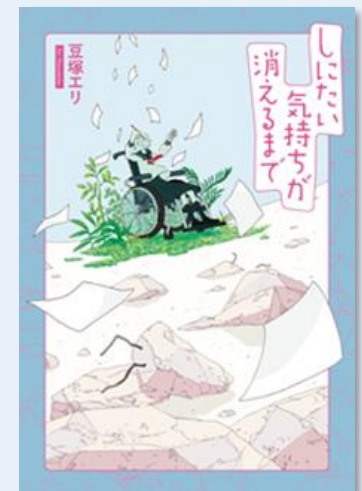
【土台となる考え方】

ニューロダイバーシティ
インクルージョン

トラウマインフォームドケア
社会モデル

これら3つそれぞれのレイヤーで、「自分を知り、人とかわかり、ポジションをとる人」を育成する、言い換えれば、「メタ認知能力」「受援力」「自己実現力」を生徒に身につけさせるための土台となるのが、「ニューロダイバーシティ」「トラウマインフォームドケア」「インクルージョン」「社会モデル」という4つの考え方です。

これからの説明には、次のような書籍他を参考にしています。



#01 ニューロダイバーシティ

「ニューロダイバーシティ」とは、Neuro（脳・神経）と Diversity（多様性）という2つの言葉を組み合わせた造語で、「脳や神経、それに由来する個人レベルでの様々な特性の違いを多様性と捉えて相互に尊重し、それらの**違いを社会の中で活かしていこう**」という考え方です。

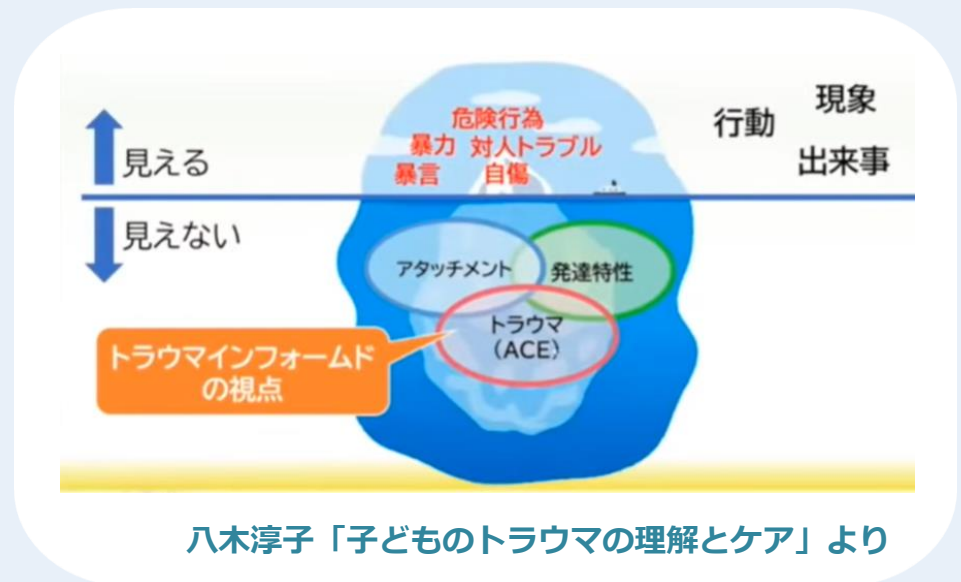
これには、障害者雇用という言葉についてまわりがちな「働く能力の低いかわいそうな人を福祉的な意義で採用してあげる」ということではなく、例えば、自閉スペクトラムの特性が生み出すことの多い「高度な詳細さ、強力な論理的・分析的思考、綿密な検査、ゼロエラー耐性を必要とする作業機能を実行する」スキルをプラスに捉え、それを活用するなどの、**積極的な文脈**が含まれています。

清明高校では、「発達障害は多様性の一つであり、尊重されるべき」というニューロダイバーシティの考え方を土台の一つとしています。

#02 トraumainフォームドケア

暴言や無気力、わがまま、暴力、危険行為などに接したとき、私たちはそれを生徒個人の特性に起因させてしまいがちで、その引き金や背景にはなかなか意識が向きません。でも、もしかすると、その生徒の言動は、過去の傷つきへの防衛反応なのかもしれません。

外から見て「問題行動」に見える言動は冰山の一角に過ぎず、なぜその言動が起きているのかを「見える化」する視点が必要です。そして、そのために「めがね」の役割を果たすのがトラウマインフォームドケアです。「もしかしたらトラウマによる傷つきを抱えているのかもしれない」というまなざしを持って相手に接するというトラウマインフォームドケアの考え方も、清明高校が大切にしている土台の一つです。



#03 インクルージョン

「インクルージョン」について、日本ではまだまだ正確に理解されていないようです。本田秀夫氏が著書でインクルージョンと、その誤解について述べておられますので、右に紹介します。

インクルーシブ教育を誤解している人たちは「多様な人たちが同じ活動に同じ参加の仕方をする」と捉えますが、清明高校では、

「多様な人たちが個に応じた活動に多様な参加の仕方をする」と捉え、この適切な

インクルージョンという考え方を土台の一つとしています。 [本田秀夫「自閉スペクトラム症の理解と支援」より](#)

社会には、多様な人々が生きています。性別、人種、国籍、民族、文化、階級、障害の有無を問わず、「すべての人が平等に参加できる社会」をつくっていくというのが、インクルージョンの考え方です。

インクルージョンに関するよくある誤解…

「平等な参加」をするということを、みんなが一緒に同じプログラムに参加しなければいけないというふうに考える人がいます。それは間違いです。

自閉スペクトラム症の子どもの場合には、対人関係が苦手です。一部の親は、たくさん子どもたちの中に入っていると、良い刺激を受けて、自閉スペクトラム症の子どもでも、対人関係が改善し、社会性が身につくのではないかと期待する人がいます。でも、それはたくさんのアヒルの子どもたちの群れの中に、白鳥の子どもを入れておくと、良い刺激を受けて、白鳥がアヒルになるかもしれないと期待するのと同じくらい無理な話かもしれないのです。

#04 社会モデル

「**医学モデル**」は、障害は病気や怪我に起因する個人的な問題であり、医療による治療が個人の努力によって適応すべきものという考え方です。障害者はリハビリ等を通して健常者に近づき、健常者社会（マジョリティ）に適応していくことが求められます。



【前編】生徒の多様性を受けとめる学校のあり方とは？オールマイノリティの学校、京都府立清明高校の挑戦 - メガホン - School Voice Project

これに対して「**社会モデル**」は、障害は障害者にではなく社会のほうにあると考えます。例えば、階段しかなければ車イスの人は2階に上がりませんが、エレベーターがあれば上がれます。この場合、障害は「車イスの人であること」ではなく、「階段しかないという環境」、つまり社会のほうにあると考えます。

「社会モデル」は、2006年に国連で採択された「障害者権利条約」で考え方が示され、日本の改正「障害者基本法（2011）」においても、この考え方が採用されています。

清明高校は、**障害は、障害のない人を前提とした環境・しくみや考え方を作ってしまっている社会の側の問題である**という「社会モデル」の考え方を土台としています。

【つばめ七則】

そして、この4つの土台となる考え方を、発達障害やトラウマだけではなく、疾病、アタッチメント（愛着形成）、家庭の状況、アディクション（依存症）、性自認などにも広く適用し、指導・支援を行っていきます。その際の方針を知ってもらうため、茶の湯の心得「利休七則」に照らしつつ、指導・支援の心得「つばめ七則」を御覧ください。

指導・支援

発達障害 トラウマ 疾病 アタッチメント
家庭の状況 アディクション 性自認 . . .

土台となる 考え方

ニューロダイバーシティ
適切なインクルージョン

トラウマインフォームドケア
社会モデル

#01 茶は服のよきように点て

・・・「指導者起点」から「学習者起点」へ

茶の点てやすさではなく、茶の飲み心地を第一に点てなさいという心得です。つまり亭主の都合ではなく、客のためにどう点てるか。これは、客の好みや都合に合わせるということではなく、「今、ここ、この客」に最も適した一服を亭主が心を込めて提供するということだと思います。

教師にとって都合がよいかどうかという「指導者起点」ではなく、**生徒にとってそれが有効かどうかという「学習者起点」**で指導・支援していくことが大切です。現在の教育活動やしくみ・手続きが学校の都合だけで進められていないか、授業やホームルーム、部活動での指導・支援が教師の自己満足になってしまっているところはないか、絶えず振り返るとともに、逆に生徒にとってマイナスになることは、たとえ生徒・保護者の要望であっても受け入れないという、教育機関としての毅然とした姿勢も必要です。

#02 炭は湯の沸くように置き

．．．「教え込む教育」から「引き出す教育」へ

しっかりとお湯が沸くように火をおこすためには、最初の炭の置き方にこそ最も注意を払いなさいという心得です。これは、炭の能力（材質や形状、色）をしっかりと見極め、釜を据える前に炭を最適な状態に置き、その後は炭の燃えるに任せて「松風（最もよい湯加減）」を待つということだと思います。

生徒はだれでも何らかのポテンシャルを持っています。教師が上から一方的に与え、身に付けさせるという手法ではなく、生徒の潜在能力を信じ、生徒が主体的に取り組む中で自分自身で気づき、学び、成長することをサポートするという手法が「引き出す教育」です。

例えば、過去の「総合的な探究の時間」において、同じメニューをすべての生徒に与え身に付けさせようという「教え込む教育」の手法がとられていました。困りのある生徒を想定した目的や内容は素晴らしいものでしたが、個々の生徒からすれば不必要であったり、どう

しても抵抗感があって取り組めない内容の時もあり、必ずしも最適なものではありませんでした。

現在の「探究活動」では、思い切って生徒の興味関心を大切にし、企画力・実行力を信じて教員はコーチに徹しています。最終の発表や積極的な質疑応答の様子を見る限り、主体的な活動を通して気づき学ぶという「引き出す教育」によるプラスの効果徐徐に出てきていると感じます。

ティーチャーから脱却して何になる？

コーチは、①新しい気づきをもたらす、②視点を増やす、③考え方や行動の選択肢を増やす、④目標達成に必要な行動を促進するために効果的な対話を作り出し、生徒が主体性を持ちながら自己実現を果たせるようサポートします。

ファシリテーターは、ワークショップが典型ですが、発言を引き出し、共有・整理し、生徒が新たなアイデアや問題解決策を出せるよう導く進行役です。

コーディネーターは、授業や行事のニーズに応じて外部人材とつながり、生徒に新たな知見や刺激をもたらす人です。

つばめプロジェクト

「冒険モード」×「異年次交流」
＝“ココロオドル探究”

Q. つばめプロジェクトって？

A. これまでとは一味違う探究活動です！

「冒険モード」

自分の好きなことや興味・関心のあることの中からテーマを設定し、それとことん深掘りしていこう！
みなさんの「これをやってみよう」という気持ちや、主体性を大事にしながら進めていきます。

×

「異年次交流」

自分と似たような興味・関心を持つ人が違う年次にいるかも・・・！？
すごいと思う先輩や、リスペクトできる同級生・後輩に刺激をもらい、探究活動をより深めよう！

みなさんにとっての・・・“ココロオドル探究”をしよう！

今後は教師の役割や仕事内容も変化する可能性があります。特にA I の出現により、すでに教科書に書かれていることを教えるという役割は、もう必要ない時代が来ているのではないのでしょうか。

#03 花は野にあるように

・・・「短所の克服」から「長所の伸長」へ

いわゆる茶花の「投げ入れ」のとおり、自然の中に咲いている本来の姿のように生けなさいという心得です。つまり、「生け花」のように技巧を凝らしたり、華やかに飾ったり、種類を取り合わせたりするのではなく、野にある自然の美しさをそのままに引き出すということだと思います。

私たちはともすれば生徒のマイナス部分にフォーカスし、「短所の克服」や「苦手の解消」というもっともらしい言葉で生徒本来の魅力を台無しにしてしまいがちです。しかし、時には曲がった枝も好んで選び、その花の本質や自然そのものの美しさを表現するという

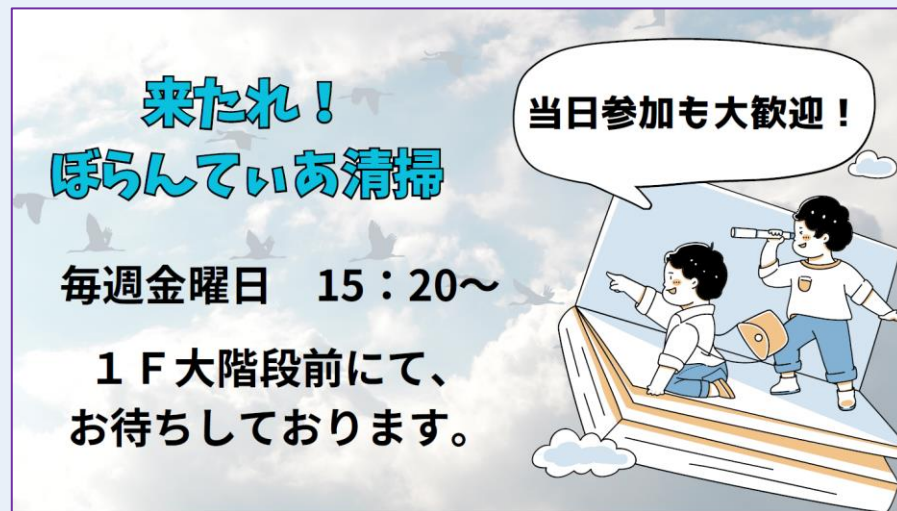
「投げ入れ」の感性を大切にし、短所の克服の前にまずは**思い切って長所を伸ばす、好きや得意なことに躊躇なく打ち込ませる**ことを優先したいと考えています。

つばめ祭でのパフォーマンスや、つばめ杯での選べる参加形式、そして、制服の標準服化も、生徒の「長所の伸長」「好きや得意の発揮」に資する取組だと思っています。

また、清掃ボランティアや、広報ボランティアでは、生徒自らが自分の得意なことを生かして、多くの人に働きかけ、成果と充実感を得られています。

一昔前であれば、「学校行事でゲームな

んて」と言われたことでしょう。しかし、現在は世界中でゲーム業界は拡大し、「好き」や「自分らしさ」を思う存分発揮しながら生計を立てている多彩な人々がいます。好きなことであれば、自分で選んだことであれば、たとえ乗り越えなければいけない困難や課題に出会ったとしても、なんとか乗り越えられる可能性があります。そうすれば、やり抜く力も集中力も、忍耐力も回復力も自ずと身についてきます。短所の克服はそれからでも遅くありません。



#04 夏は涼しく冬暖かに

・・・「生徒を変える」から「私たちが変わる」へ

さりげない視覚や聴覚などの表現を使って「涼」や「暖」を感じさせる趣向を凝らしなさいという心得です。利休の時代はエアコンがありませんから、夏であれば露地に打ち水をしたり、床に「涼一味」の軸を掛けたりして「涼」を演出して心安まる空間（＝環境）を創造しました。これは、客に我慢を強いるのではなく、感性による工夫という主人の心がけによって、少しでも過ごしやすいように客をもてなすということです。

不登校は「はじまり」ではなく「結果」です。生徒は学校へ行きづらくなっても誰にも相談できず、我慢して登校するようになりますが、我慢が限界に達してほんとうに登校できなくなる、つまり不登校の状態になったときには、かなり疲弊した状態になっています。入学以前の生活では、特性に対する家庭や学校の理解不足と不適切な対応により、生活上の支障が引き起こされ、二次的な問題を生じた結果として不登校に至った生徒が多数と思われます。

#05 刻限は早めに

・・・「自信を与える」から「自信を返す」へ

常に自分の中の時計の針を進めておき、心にゆとりを持って人と接しなさいという心得です。これは、「5分前集合」のこと、つまり人を待たせないよう時間を守るということを言っているのではなく、むしろその逆で、待たされてもストレスを感じないぐらいの余裕と寛大さ、心のゆとりを持てということだと思います。

学校教育は、「教育の機会均等」と「体系的・組織的な教育」を柱に、これまで大きな成果をあげてきました。その一方、学力や運動能力、協調性という面で相性が合わない生徒たちは、学校で生活することで、周囲から好ましくない評価や圧力を受け、次第に自信を奪われてきました。そうした前提に立って、私たちは「意識しなければ生徒の自信を奪ってしまいがちである」ということを自覚し、**「自信を与えることよりも、まずはこれ以上自信を奪わないこと」**を第一に心がけるべきだと考えています。そのためには、否定されず、他者と

比較されず、失敗が咎められない環境、つまり「**安心して失敗できる環境**」が大切です。

失敗は一時的なつまずきに過ぎず、学んだり改善したりするための貴重なチャンスです。多くの人間は失敗しながら前進します。ところが、失敗を責め、笑い、叱ることはないにしても、失敗しないよう先回りして手を打つ、アドバイスをするという親や教師の行為はよく見られます。こうした過保護・過干渉は、「失敗はよくない」というメッセージとなって生徒の心に届きます。例えば、サマーキャンプについても、教員が無理に参加を働きかける行為は、「不参加＝失敗 → ダメな人」というメッセージになりえます。「地獄への道は善意で敷き詰められている」という言葉ありますが、私達が善意で、無意識に生徒の自信を奪うことのないよう、長い目で見守りたいものです。「行っとならばよかった」という傷の浅い小さな失敗を経験し、次の年度に参加する。これが本校のねらいであり、生徒が上手に失敗を経験する場でありたいと思います。



#06 降らずとも傘の用意

・・・「指導を伴わない評価」から「指導を伴う評価」へ

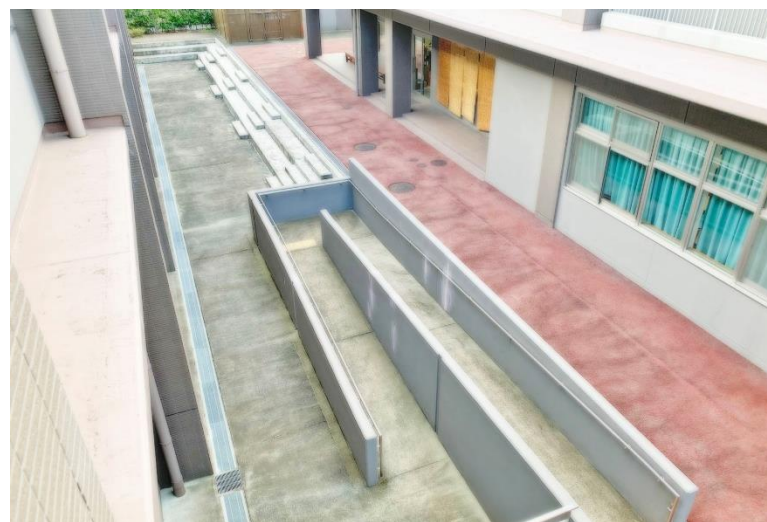
不測の事態を想定し、備えを怠らないようにしなさいという心得です。先を読むとともに、何が起こっても適切に応じられるやわらかい心を持ち、必要なものを備えることにより、客に憂いを持たせないという、亭主に必要な気遣いが示されています。

「傘」は、雨という現在とは異なる状況になった時に必要となる備えですが、ここでは生徒を評価する上での様々な工夫に例えてみます。例えば、文字を書くことに困難がある生徒の場合、誤字やひらがなをその都度減点すると、その教科の理解度や考え方の評価ではなく、書字能力の評価になってしまい、これは学習指導要領上、その生徒の能力を正当に評価しているとは言えません。また、忘れ物が多く、提出物が出せない生徒には、事前のリマインドや、その場で課題に取り組ませる等の指導者側の工夫（＝傘）が必要です。しかし、学習面で困難を抱える生徒について、単に合格基準を引き下げるなど公平性を損なうような評価は

できません。学校としては、その段差を乗り越えないでよしとするのではなく、段差を乗り越えるためのスロープや手すり（＝解説動画や多様な難易度の課題、選べる表現・発表方法など）を用意し、生徒が成就感と達成感を持って乗り越えるための支援を行います。

清明高校では、手立てを講じることのないまま単位を認定する・しないという「指導を伴わない評価」ではなく、例えば、生徒の以前の状況と比較した進歩の度合いを評価する「個人内評価」や「代替手段による評価」も取り入れ、個々の生徒に応じて設定した目標をやり切らせて単位認定につなげるという、「指導を伴う評価」をお願いしています。

ここで例にあげた「個人内評価」や「代替手段による評価」が上の文のスロープや手すりにあたり、利休が例にあげた「傘」にあたります。



保健室と体育館の間のスペースです。スロープや手すり、3段・6段の階段のように、指導と評価のバリエーションが求められます。

#07 相客に心せよ

・・・「そろえる教育」から「伸ばす教育」へ

互いに気遣い、思いやる心を持つようにしなさいという心得です。同席した客として縁あって居合わせたのだから、互いに尊重しあい、楽しいひとときを過ごそうということです。

本校には多くの中学校から少数派（マイノリティ）が集まってきているため、小・中学校時代のように標準に合わせるという圧力や周囲に対する劣等感を感じる事が少ないこと、また、つまずきや困りを自分以外も経験してきていることを互いにわかり合えているという安心感が存在していることについて、すでに述べました。

加えて、清明高校では、他校で行われているような過剰訓練、つまり苦手を克服させるための度重なる注意・叱責や過重な訓練・反復練習などは、一切行わないこととしています。私たちは、視力が衰えれば訓練による回復ではなく眼鏡による補完を行います。黒板をひっかく音に対してはそれに慣れるまで反復練習するのではなく耳を塞ぐことが大切です。とこ

ろがいざ教育活動になると、それぞれの特性に応じた配慮・援助が忘れられ、遠く離れた小さい文字を読み取る特訓や黒板をひっかく音に耐える訓練のような理不尽な指導、いわゆる過剰訓練が行われることがあります。

一昨年度・昨年度とも、生徒からの発案で、学習障害や感覚過敏などの当事者生徒が、日常の困りと学校生活への提案や、本校ならではの学習システムについて話してくれる教職員研修「清明ダイバーシティ・ピッチ」を実施しました。また、生徒と教職員が同じテーブルを囲んでだれもが参加しやすい授業を提案し合う、対話型研修も開催できました。これらの取組から、支援とは当事者の声を聞き、各々に応じた援助を共に考えることとの認識が深まりました。

教育の目的は、今ある社会に順応する人を育てること（＝「そろえる教育」）ではなく、今ある社会の在り方に疑問を持ち、よりよいものへと変革していける、言わば型破りでユニークな出る杭を育てること（＝「伸ばす教育」）にあります。

清明ワーキンググループ

授業の困りごとについて 対話しよう

～自分のペースで学ぶ授業を目指して～

2023, 12, 19 Tue
15.30 - 17.00 PM

職業デザイン室

観覧自由！

対話の参加
希望者は↓



申込締切：12/15 16:00

④ アクションプラン

本年度の学校経営 5の重点と10のキーワードです。

#1 学ぶ楽しさ

- 指導と評価の工夫改善
- 授業のD X（個別最適・自由進度）

#2 主体的・協働的な活動

- アウトプットの充実
- 探究的な活動

#3 学習者起点

- 足場かけ
- バイアス払拭

#4 教育のU D化

- 特性についての理解
- 主体的な教職員研修

#5 働き方改革

- ダイバーシティ
- ワークライフバランス

【指導と評価の工夫改善】

#1 学ぶ楽しさ

一斉一律の授業をして（＝指導）知識の量を試験で測る（＝評価）という従来の方法と決別し、定期考査に頼らない総合的な評価、「フレスタ」や新しいフレックス科目の設置、学習スタイル別講座編制、探究活動の充実などの改革を行ってきました。また「欠課過多によらない単位不認定の解消」もほぼ実現できています。

しかし、多様な生徒がそれぞれに「学ぶ楽しさ」を実感できているかには、濃淡がありそうです。個別最適な学びと協働的な学び、多面的・総合的な評価とその活用について、検証・研究を深め、**生徒が「学ぶ楽しさ」を実感**できる学習指導を加速させたいと考えています。



フレスタグリーン



探究活動

S A M R (セイマー・モデル)

① Substitution (代替)

機能的な拡大なし、従来のツールの代用



- 紙 → デジタル
- 鉛筆 → アップルペンシル
- ラジカセ → タブレット

② Augmentation (増強)

代用に加え、新たな機能が付加



- 板書・教材提示・ノート提出の効率化
- 写真・動画撮影

③ Modification (変容)

実践の再設計を可能に



- 模範演奏・遅延動画による個別学習
- 発言・発表のオンライン化

④ Redefinition (再定義)

以前はできなかった新しい実践を可能に



- リモート授業・グループワーク
- オンデマンド反転学習
- 個別最適化学習 (AI機能アプリ)
- 脱TEACHER

上の資料は・・・令和3年11月のICTフロンティアキャンプで示されたものです。以来3年をかけて、本校でも①から④へと順にICT活用が深まってきました。令和6年度には、全科目でオンデマンド教材等を活用した自由進度学習の導入、通信教育の試行も実施できました。

③「変容」については、例えば人前で発言することが苦手な生徒が、AI音声の活用によって抵抗なくできたり、講座内の生徒の習熟度が幅広くても、1人の教師で指導が可能になったりと、多様な生徒の学習ニーズに応えられるようになってきました。

④「再定義」という、従来の授業を破壊し再創造する段階も、多くの先生方が当たり前に取り入れ始めています。この変化こそがDXであり、ICT導入の目的ですが、生徒の「学ぶ楽しさ」の実感と、教育効果の向上につながる必要があります。今年度もさらなる活用で、生徒が**自分のペースで、主体的・協働的に学ぶ**授業の研究・実践を進めていきます。

【授業のD X】

D Xの具体的な在り方とは、例えば・・・

▶ オンデマンド化

授業のライブ配信は、授業の劣化コピーです。そうではなく、1.5倍速やスキップ、リピート再生等により、生徒が個に応じたように利用できるよう、オンデマンド化すべきです。

→ **いつでも、どこでも、だれでも、なんでも、どのようにでも、...**

▶ アプリの有効活用

英単語や漢字練習、その他の教科科目においても、非常にすぐれたアプリが無料で使えます。プロが作ったすばらしいツールがあるのに、小テストを自作し、どの生徒にも一律に同じ内容のドリルをさせるのは効果的ではありません。

→ **自前主義から脱却しましょう**

▶ 新しいものは積極的に活用

ロイロノートや「すらら」など、便利なアプリのより進んだ活用についてはチャレンジした先生から発信もしていただいています。A Iツールもどんどん活用してください。

→ **「目的・用途」よりも「使ってみる」が大切です。**

【アウトプット】

2 主体的な活動

R5のコロナ明け以降、ICTも活用しながら、様々な場面での生徒のアウトプットの機会が増加・充実しています。「ウィキペディア」への研究成果の掲載、地域の商店街と連携した動画作成や学校祭での出店、ルールメイキングサミットでの発表など、授業・総探・主体的な活動等において、学校内にとどまらない発表や他者との連携が進んでいます。これらの活動を通して生徒達が学びを深めているのはもちろん、精神的にも大きく成長し「気付けば自信が付いていた」という姿を見てきました。学校が安心・安全にアウトプットできる場であることを大前提に、さらにスリリングなアウェイへ送り出し、学校外の人とのやりとりを経験することを通して生徒のさらなる成長を促す。これも「教え込む教育から引き出す教育へ」の一環です。



【探究的な活動】 # 2 主体的な活動

「発表が苦手」「基礎が身についていない」と思われがちな本校生徒ですが、チャレンジデー（リフレッシュデー）や総探での様子を通して、多くの生徒たちが高いポテンシャルを持ってることを、多くの教職員が確信しています。R6年度からは、年次の枠を飛び越えた探究活動も導入し、さらに学ぶ楽しさを実感できる時間を増やしています。

また、つばめ祭やつばめ杯でのパフォーマンス、生徒会とコラボした生徒企画イベント、チャレンジデーやS-フェスなど、生徒がそれぞれ「やってみたい」「他の人にも知ってほしい」という積極的な動機からチャレンジする場も充実してきました。生徒も教職員も新たな発見があります。

今後も鉄ヲタ・アニメ聖地巡礼等の生徒企画型ツアーや「ヲタ活・推し活」の発揮の場、そして何よりも普段の教科・科目での探究的な活動の充実を図りたいと考えています。

【足場かけ】 #3 学習者起点

今年度より、中期経営目標の2つ目に「安心して自ら選び、学ぶことができる環境づくり」をあげています。シン・会議を中心としてそれらの案を作成いただいている中で、「生徒が小さな失敗をしながらも、安心して選択したりチャレンジできるために、教員が適切な支援や足場かけを行う必要がある」という思いを聞いてきました。

生徒自身も気付いていない、また上手に表出できない困り感やニーズを多角的に捉え、適切に支援ができれば、生徒自身の力で乗り越えていけることも多いでしょう。ただし、それらの支援が「過保護・過干渉」であったり、型にはめようとする「勘違いの支援」では台無しです。**「適切な支援・足場かけ」とはどのようなことか、是非、私たち教職員が実践・交流しながら研修・研鑽を深めていきたいことです。**

【バイアス払拭】

#3 学習者起点

「タブレット一つで勉強できるのだから、机は必要ないのでは?」、「ソファや畳に座った方が、集中して作業ができる」などの生徒からの声も受けて、新しいタイプの教室づくりを進めています。それらの教室の使用感についてのアンケートでも「授業に集中できる」=88.2%、「ディスカッションしやすい」=76.4%という肯定率です。今まで「教室というのは全員が前を向いて姿勢よく受けるもの」という「思い込み」「思考停止」がありました。教室レイアウトに限らず、本校の授業の特色に応じた学習環境・活動の最適化が図れるよう、「普通」という思い込みを批判的に見直し、学習者にとって有効かどうかという判断を大切に、学校の魅力化に取り組んでいきましょう。



【特性について】 # 4 教育のUD化

「特性のある生徒へのかかわり」について、次の考え（令和4年3月まとめより）に基づいて今後も体制・対応を整備します。

- 特性に対する大人や学校の理解不足と不適切な対応により、生活上の支障が引き起こされ、二次的な問題を生じた結果として不登校傾向となって入学した生徒が多く存在する。
- 支援の目的は、生きづらさの改善と社会参加に向け、それぞれの障害の特性に応じた援助を行うことであり、決して発達障害のある生徒を定型発達に矯正することではない。
- 特性に最適化した教育の前に、まず環境調整を行うことが大切で、特に過剰訓練に陥らないよう注意が必要である。
- 環境調整を行うにあたっては、個々の生徒の存在そのものを認め（「あなたは白鳥であり、そのままでよい」）、苦手克服に執着しない（「あなたがアヒルになる必要はない」）という教職員のマインドセットが不可欠である。
- その上で、特性に最適化した教育を行うにあたっては、生徒の主体性を尊重し、個人・グループによる探究・プロジェクトや体験を通して気づき学ぶ「引き出す教育」により自信の回復をめざす。

【主体的な教職員研修】 # 4 教育のUD化

本校でも年数回、研修会を行っていますが、多様な教育課題をすべてカバーできるはずもなく、教職員の異動も毎年あり、とてもではありませんが、研修参加のみで私たちに必要な知識・スキルをすべて身に付けることはできません。

生徒と同じで、学んで身に付けるためには「主体的に学ぶ」ことや「実践する」こと、そしてそれらが「習慣」になることが必要です。単発の研修会に受け身的に参加するだけでは知識・スキルは身に付きません。

今年度は、シン・会議メンバーと各分掌部長が協働し、様々なテーマを設定して主体的に研究・実践すると同時に、アウトプットの機会を複数回設けて、全教職員のモチベーションアップにもつなげたいと思います。「学び続ける教職員集団」の姿は生徒の学ぶ姿勢にも好影響があるのではないのでしょうか。そうした「主体的な教職員研修」の実現のために、

「ティーチャーズバイブル～実践編・資料編」の整備・更新も引き続き進めます。

【ダイバーシティ】 # 5 働き方改革

開校5年目までの清明高校では、部長の先生は全員男性でした。それから1名、2名と、少しずつですが女性が増えてきています。性別だけではなく、年齢、国籍、職歴、価値観、障害の有無、ライフスタイルなど、多様性を生かした学校運営ができればと考えています。

また、R5年度より校内のプロジェクトチームである「シン・会議」では、若手の教職員が中心となって、働き方改革についてもチャレンジな提案をしてくれています。ベテランも中堅も若手も、立場の違いを超えて提案していける、そんな垣根の低さと心理的安全性が実感できる風土ができつつあります。加えて近年は、男性教職員の育休の活用も増え、ワークライフバランスやダイバーシティが進んでいます。

趣味・嗜好のちがいも多様性の大切な一つです。Slack の Random では、教職員の多様性も垣間見ることができ、今後もみなさんの投稿を楽しみにしています。

【ワークライフバランス】

5 働き方改革

職員朝礼や中学校訪問の廃止、電話応答時間（8:30－17:00）の設定、通知表の所見・押印の廃止、指導要録・調査書の所見のテンプレ化、長期休業期間の会議・研修会の禁止、日々の家庭連絡の廃止など、他校に先駆けてさまざまな働き方改革を進めてきました。さらに昨年度は、「部活動の在り方ワーキング」を開催し、生徒と教職員が部活動の充実と教職員の時間外労働の縮減の両立について対話を重ねることができました。

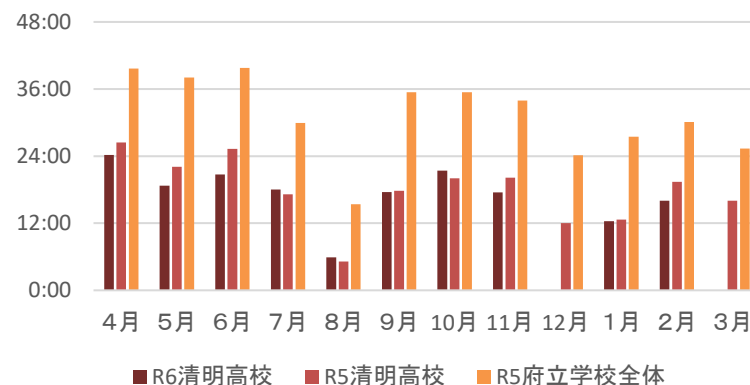
衛生委員会では、健康や精神的な充足感を得られる職場づくりにも注力し、心身の健康づくりにつながるイベントも開催していただいています。

ジョンソン・エンド・ジョンソン時代に、尊敬するイギリス人の先輩から教わったという言葉

**「慢性的な残業は無能力の証であり、
悪徳である」**

がいつも心のなかにあったゆえではないかと思う。
（新将命『経営の教科書』より）

時間外勤務の比較



以上です。

一年間、よろしくお願いいたします。

